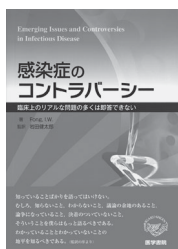


書評

[評者]
名郷直樹
武蔵国分寺公園クリニック
院長



感染症のコントラバーシー 臨床上のリアルな問題の多くは即答できない

Fong, I. W. 著
岩田健太郎 監訳

A5判 頁504 2011年
定価 5,775 円(本体 5,500 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01182-2]医学書院刊

岩田健太郎氏が監訳を担当された『Emerging Issues and Controversies in Infectious Disease』の翻訳である。それだけ紹介しておけば、もうこれは読むしかないという人も多いだろう。そこで私が追加できることは何か、と自問しながら、この本について書く。

中耳炎や副鼻腔炎、呼吸器関連感染症、敗血症、偽膜性腸炎など、ありふれた問題に対する問題が、わかりやすくというか、わかりにくくというか、まとめられている。忙しい外来中や病棟でこの本を参照したりすると、ポイントだけを明確に書いてほしいと、文句を言いたくなるような本である。しかし、本書は臨床現場でどうすればいいのか参照するために書かれた本ではない。時間がある時にじっくり読む本である。

本書の特徴は以下のような記述にあると思う。重症敗血症に対するステロイドの効果について述べた部分である。

「死亡の相対危険度をベースラインの 35% から 15~20% 低くするにはサンプル数が小さすぎ、それには少なくとも 2,600 人の試験を必要とする。そのような圧

倒的な数の試験が必要か否かは議論の余地がありそうである」

通常の記述では「明確なエビデンスはない」と書かれる部分である。エビデンスがないからといって何もしないというわけにはいかないだろう、というような意見は、単にエビデンスがあるとかないとかいう大ざっぱな記述に対する正当な反応である。上記の記述は、「明確なエビデンスはない」という明確であるが決して正確でない表現に対し、臨床医のためのエビデンスの見方の一つを明示している。しかし、多くの臨床医はこの記述についていけないかもしれない。ついていけないとしたら、まず本書を通読することをお勧めする。今まで自分自身がエビデンスと呼んでいたものが、まったく違った様相で見えてくるに違いない。

本書をすべての臨床医に勧めたい。臨床医が判断の材料にしている研究結果というものが一体どんなものなのか、単に明確とかあいまいというだけでなく、もう一度じっくり考えるために。